

1. 評価結果概要表

作成日 平成21年 2月24日

【評価実施概要】

事業所番号	0370101362		
法人名	有限会社 絆		
事業所名	グループホーム 絆		
所在地	岩手県盛岡市仙北3丁目14-41 (電話) 019-634-0433		
評価機関名	(財)岩手県長寿社会振興財団		
所在地	岩手県盛岡市本町通3丁目19-1 岩手県福祉総合相談センター内		
訪問調査日	平成20年12月15日	評価確定日	2月24日

【情報提供票より】(20年 11月 26日事業所記入)

(1)組織概要

開設年月日	昭和・平成 15年 6月 1日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	8 人	常勤	6人, 非常勤 2人, 常勤換算 7.5人

(2)建物概要

建物構造	木造 造り		
	2階建ての	1階 ~	2階部分

(3)利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	33,000 円	その他の経費(月額)	22,500+3,000(1~4月)円	
敷金	有(円)	無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	有(円)	有りの場合 償却の有無	有/無	
食材料費	朝食	円	昼食	円
	夕食	円	おやつ	円
	または1日当たり		1,000 円	

(4)利用者の概要(11月26日現在)

利用者人数	9名	男性	0名	女性	9名	
要介護1	-	名	要介護2	5	名	
要介護3	2	名	要介護4	1	名	
要介護5	1	名	要支援2	-	名	
年齢	平均	84.5歳	最低	75歳	最高	95歳

(5)協力医療機関

協力医療機関名	真瀬医院、小笠原歯科医院
---------	--------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

国道4号線と盛岡環状線(旧国道4号線)の両幹線道路に挟まれた住宅街に立地している。2階建ての木造住宅を活用したグループホームで全体的に家庭的な雰囲気が、かもし出されている。門を出たすぐ近くに「せせらぎ通り」と称する水路沿いに低木の植樹と花壇とベンチが配された石だたみの散策路のある小公園があり環境的に良い。この花壇の一面を地域から借り受けて「絆」が手入れをしている。開設以来5年になるが、職員の異動が比較的少なく利用者と一緒に毎日の生活に取り組んでいることが垣間見られるし、地域の理解や医療機関との連携も進んでいるように見受けられる。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	前回の評価を真摯に受けとめその改善に向けて取り組んでいる。そのことも前提に踏まえながら災害対策については、住宅密集地に立地している視点からも、地域連携の中での組織体制と訓練等に一層取り組まれることを期待したい。
重点項目②	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	評価の目的、意義については職員全員に徹底し、理解を求めると同時に、一人ひとりの職員がシートに記入することによって自分の取り組んでいるあり方について省る機会にもしている。その集大成がグループホームの自己評価である。
重点項目③	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	現在のホーム状況の報告に基づき、委員からの質疑と話題が出され、それらを中心に進められているが、委員それぞれの意見の中から運営に反映されているものもある。委員である町内会長さんや民生委員さんを介してホームの要望が実現した「せせらぎ通り」のベンチ設置の件や、今後の課題である地域防災体制の件などがある。評価への取り組み状況からテーマを絞った内容の取り組みを期待したい。
重点項目④	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	苦情受け付け窓口、投書箱の設置など多様な方法で家族の意見や意向を求めている。実際には面接時に伺うことが多い。現在のところ運営に反映するようなものは出されていない。しかし過去の例からも家族の意向は真摯に受け止め運営に反映しようとする姿勢は保っているし、今後とも意見が率直に出るような取り組みを工夫しようとしている。また家族との関係も良好である。
重点項目④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
重点項目④	「グループホーム絆」も仙北三丁目町内会に参加しており、ゴミステーションなども活用しているし、ホームの事情で可能な状況の中で町内行事の「せせらぎ通り」の清掃や除草作業にも参加、運動会にも町内テントの中に「絆」利用者の席を設けていただき参加している。去る開設5周年記念には、地域公民館を利用させていただくと共に準備や後片付けに地域の方々のご協力をいただいた。今後共々「絆」は一家庭として地域との相互的関係を築いていくことを願っている。

2. 評価結果(詳細)

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	グループホーム開設時からの理念である利用者一人ひとりの人格の尊重、能力に応じて、自分らしく自立した生活ができるように支援することと、合わせて、地域の中での人とのふれあいと絆を深めていこうとの願いも加味したものである。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	絆の名に示すように、利用者も職員も共に家庭的雰囲気の中で支え合いつつ日常生活を送るため、理念を共有することが大切とされ、毎月の職員会議の場では必ず意識化をしているし、ケアプラン作成時の確認や申し送りノートへの理念の貼付などいろいろ工夫している。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	仙北三丁目町内会に加入しており、町内会長さんには運営推進会議の委員もお願いしている。開設5周年記念会にも全面的に町内会の応援を得たし、仙北地域の連合運動会でも三丁目町内会のテントには絆の利用者の席を設けていただいている。絆からも「せせらぎ通り」の清掃や除草には町内会員と共に作業をする。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	前年度の評価、特に指摘された部分については真摯に受け止め改善に向けて努力することが、サービスの質の向上に資することを職員全員で理解することで取り組んでいる。評価シートを全員に配布し記入されたものを検討しまとめる方法で取り組んでいる。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこで意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議のメンバーに町内会長や民生委員の方々が入っており地域との関係を深めていく上で極めて良いと思われる。会議の内容はホームからの報告と委員からの話題になっている。その中で民生委員の働きかけもあって、「せせらぎ通り」へのベンチの設置などはホームの要望が市当局を動かした例である。	○	開設5周年記念行事の町内会長さんや民生委員さんのコメントにあるように、町内にグループホーム絆が存在することを“ありがたい”と思い、町内のご高齢の方々にも朗報であった”とされ、推進会議が地域との連携に大きな働きをしていることを踏まえつつ、自己評価や外部評価に対する具体的なテーマの話し合いと運営への反映に期待したい。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	市担当者とはお互いに情報交換はしている。例えばケアマネジャーの雇用関係などの状況報告や、開設5周年記念には市の介護高齢福祉課長の来席をいただいている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	毎月手紙で日常生活の状況を知らせている。また、手紙の他に利用者一人ひとりの状況を写真主体に編集した“絆ニュースペーパー”も送っている。本人の状況に応じて、その都度、速やかに電話連絡をすると同時に内容を記録する。金銭出納状況もコピーで送る。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の意見は主に面接時にお聴きすることが多い。不満・苦情など今のところは無い。開設当初は段差解消などの要望があり、可能な部分についてはそれに応じてきたし、今後とも意見・要望に適切に対応した運営に取り組もうとしている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	職員の異動は比較的少ない。退職等の異動があった場合は毎月の手紙や絆ニュースペーパーで家族に知らせている。利用者のダメージを防ぐために、新入の職員に経験豊かな職員を付け、マンツーマンで各勤務帯のサイクルを一定期間に渡って対応しながら馴染ませる工夫をしている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新人教育のあり方として、当事業所では前項で記述したような取り組みが即新人教育であると共に、職員全体についても施設内での実践研修(教育)を大事に考えている。外部研修への対応もそれぞれの段階によって参加し、個々の研修履歴も整備している。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	毎月、県グループホーム協会のブロック交流に主にケアマネジャーが出席している。また、運営推進会議の場で、同業者である「ほっともとみや」「ゆうゆう黒川」「愛の手」などとの交流も行った。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	家庭的雰囲気を作り出しておく。利用を予定する本人に来て見ていただき雰囲気を感じ取って貰ったり、面接し、じっくり話し合うことでコミュニケーションを取っていく。何回でも関わりを持ち、関係を育む事などにより、ご本人が納得できれば、家族の意向も定まるものと考えられる。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながらか喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	絆は介護施設等とは違い、業務第一ではない。ふれあいを最も大切にすること、を職員全体が強く意識しながら取り組んでいる。利用者の経験と知恵から学び、ある時は「出て行け」と職員が怒られながらも、支えあい共に過ごしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者本人の思いや意向の把握は介護計画作成の時と、全職員が利用者の日常生活の場での一瞬一瞬の言動を観察したことを踏まえ、チームとして一人ひとりのことを確かめていく努力をしている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	本人の状況、家族の意向、職員の観察などをもとに計画の素案を立て、それを全職員による会議で検討し、介護計画の作成をしている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	基本的には3ヶ月に1回の見直しをするが、利用者の状況に変化があった場合、その都度、管理者の指示でメモ書きにより、変更部分を業務日誌に貼付しておき、職員に周知し、終わった時に外し、ケアマネージャーが計画書に書き込むなどの迅速な対応も工夫している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	医療連携での看護師の派遣によって、グループホームで療養出来るようになった。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は、二人の利用者以外は、連携医療機関になっている。いずれにしても受診にあたっては、職員が支援対応をすることになっている。通院介護の場合の情報交換もきっちりやっている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	一般的な方針は作成しているし、ターミナルまでを考えている。しかし、今後、看取り介護に取り組むにあたって、家族と職員と医療の連携を強め、何回も何回も話し合いながら意識の共有化に努めて欲しい。とりわけ職員の意識を高めることに取り組んで行きたい。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	個人情報マニュアルで研修を行い、意識を深めた。利用者一人ひとりのプライバシー、特に羞恥心には注意をしており、入浴や排泄支援及び日常生活支援にもあたっている。個人情報の取り扱い同意書も取っている。個人情報記録など、当座、必要なものは一階の所定の場所に、それ以外は二階事務室に保管している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者本人の望む過ごし方を本人のペースを尊重し、支援することに努めている。しかし職員の多忙な時など、せかせかしたりすることが見受けられることも時にはある。	○	職員の馴れや、感覚で職員の都合に合わせている場面もあり得るということであり、絆の理念である原点に立ちかえると共に、職員間で気付き、注意出来るような取り組みに期待したい。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	個人の生活歴を踏まえ、出来ることを出来る人にやっていたく、決して無理強いをしない。しかし、若い職員がやっていることを心配して見ている。この気持ちを大切に、やれることをやっていたくような取り組みをしている。食事はみんなで楽しんでいる。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	入浴時間帯の設定はしていない、毎日でも可能である。個々の利用者の希望に合わせて職員が対応しており、羞恥心や恐怖心を抱かないように配慮することを心がけている。その日の体調をチェックし、血圧90～150、体温37℃を入浴の可基準としている。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	茶わん拭き、テーブルにランチ用マットを敷いたりなど、役割は利用者一人ひとりの生活歴の中から現在出来るものを行っている。テレビをみたり読書をしたりなどの楽しみごと自由になっている。役割にしても楽しみごとでも一斉に何かをやるようなことではない。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	「せせらぎ通り」での散歩が日常の外出支援の中心になっている。車いすの利用者も他の利用者の介助で出かける。利用者本位で外出支援をするが、寒くなると外出が少なくなるのも事実である。せせらぎ通りの風景は五感への刺激になっている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	日中は全て鍵をかけない。玄関と門扉にセンサーを設置し、人の出入りを察知することになっている。もし、利用者が外出するような場合はその意に従って納得するまで付き添い支援をする。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	昨年度、評価でも指摘されたが、今年は避難訓練の中でも職員がいかに対応するかを中心に消防署職員から指導を受けると共に、緊急連絡、誘導、救命などの実技訓練を2月22日と10月6日に実施している。地域協力も今後の課題としている。	○	災害は火災のみならず地震も含め多様に想定しておく必要があると同時に、今までの取り組みも踏まえながら、利用者も含めた訓練を進めるよう期待したい。また、運営推進会議でも取り上げられている地域防災組織結成にあたっては、その体制の中に絆も取り込まれるように望みたい。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	画一的ではなく、利用者一人ひとりの状況を見ながら食事支援をしている。旬の食材を取り入れながら常にバランスの取れた栄養と水分摂取になるよう心がけている。また毎日の様子記録表によって、一人ひとりの食事の様子をチェックしている。	○	利用者一人ひとりに対応した支援に努めており、特に医師からの指示で水分制限がされている利用者については注意をしている。そういう努力の中でも、自分たちの献立が栄養的にどのような中身になっているか折に触れ、栄養士の分析と指導を求めることを期待したい。
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	住宅を改造して開所したもので、普通の家庭と同じ雰囲気にある。壁面には八幡宮祭典の山車絵やレトロ調の商業ポスターなどを貼っており利用者の心をなごませる工夫をしている。段差や手すりなど可能な限りの改善に努めると共に、一般的住家で居心地良い空間になるよう職員は見守っている。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者の居室は画一的でなく、それぞれ個性的な個室になっている。思い思いの物を持ち込んだり、壁に思い出のものを貼ったり、多様である。多くの居室にテレビが見られたのも特徴的であった。		